会　議　録

会議の名称及び会議の回	第2回飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会　スポーツ部会
開催日時	令和５年８月１日（火）　午後７時００分～８時４５分
開催場所	飯田市役所３階　C311-312 会議室
出席委員氏名	別紙名簿
欠席委員氏名	三石委員、山本委員
傍聴者	なし
出席事務局職員氏名	伊藤生涯学習・スポーツ課長、スポーツ振興 氏原係長、松原主事、北村主事、賜部活動地域移行支援コーディネーター
会議の概要	以下のとおり

１　開会　（進行：生涯学習・スポーツ課　氏原）

２　挨拶　（部会長）

こんばんは。１日のお仕事のお疲れのところをお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。この会はこれまで私たちが願う姿や理念等について時間を掛けてご意見を頂戴してまいりました。いよいよ、その理念を、具体的にどのようにしていったらいいのかといった点について、今後少しずつ、ご意見をいただきたいと考えております。理念、願い、こういったものが、常に根底にあった上での具体的な取り組みの姿、 そういったものになってこようかと思いますので、そんな点につきましてもご意見を賜ればありがたいと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。

３　報告事項

①前回のスポーツ部会の振り返り（事務局より報告）

・前回会議録はホームページへ掲載させていただく。(各委員の名前は公表しない)
・この取組がめざす姿についての提案に対してご意見をいただくとともに、子供たちのやりたいことを実現できるよう豊かなスポーツ環境を整えていくことを学校教育と社会教育、地域が一緒になって目指していくということ、また単に学校部活動を地域に移行するものではないということを確認した。
・意見として、「部活動地域移行」という言葉のイメージが良くない、この言葉のイメージによって本質的な理念が理解されていかないのではないかという意見をいただいた。今後この文言の使い方についても協議しまとめていく。
・グループワークでは、①活動の場に関わること、②指導者に関わること、③生徒や保護者に関わることについて、それぞれご意見を出し合った。
・活動の場に関することについて、スポーツスクールを充実すると良い、生徒のニーズの把握、受け入れる地域側の団体の情報収集をする必要がある。学校現場としては、特に競技ごと段階的に拠点校という形で進めていくことが必要ではないかという意見が出された。
・指導者に関わることについて、指導者の心得６か条の浸透や、現在、指導者が学校や地域にどのような形で関わっているのかということの状況把握をする必要がある。また、指導者の研修会については、障害者の方々への理解も研修内容としていくことが良いという意見があった。
・生徒、保護者に関わることについては、この取組の理解者を増やしていくことが必要である。

②これまでの進捗状況について　（事務局より報告）

・学校、保護者、地域指導者の意識醸成について　【資料№.１】

中学校部活動運営委員会（5/2 鼎中、5/11 緑ヶ丘中、5/18 高陵中、8/1 旭ヶ丘中）

ＰＴＡ講演会等への説明（4/8 飯伊 PTA 連合会、6/11 下久堅小学校）

・先進地視察

7/11　千曲市への視察報告　【資料№.２　ｐ1～８】

・長野県の動向　【資料№.２　ｐ９～10】

４　全体協議

①中学校部活動の現状と課題について

〇校長会アンケート結果（委員より報告）　【資料№.３】

（要旨）

・校長会が６月に１・２年生を対象にアンケート調査を実施。運動部の加入率は、全国、長野県より男女共に加入率が低い。逆に文化は高く、特に女子については高い割合を示している。少子化についてはこの下伊那地域はかなり進んでいることから、選択肢がないために加入率が低いということが言えるのではないか。

・平日、休日の練習時間については、ちょうどいい、もう少し余裕があるという生徒が大半を占めており、現状平日 2 時間、休日 3 時間程度が適当である。休日の部活動の主な移動手段は、家庭の送迎が 6 割占めている。地域移行の場合 6 割程度は保護者の送迎が見込めるのではないか。

・他の学校と一緒に活動することについて、肯定的な生徒が 6 割を占めている。理由としては、他校との交流によって新しい友人ができる機会が増えるということが多く挙げられた。異なる視点や多様な視野を持つができるということやスキルの向上、学びの機会になるということもあった。新たな練習や知識を学ぶ機会になるのではないかという肯定的な意見が多い。

・合同部活動によって参加できる可能性が高くなるとあげられており、多くのメリットがあるのではないかと考察できた。

・逆にこれから考えていかないといけないのは、不安があると答えた子供たちの声であり、コミュニケーションが苦手な生徒にとっては、1 つの壁になっているということが伺える。いじめに合うのではという心配、異なる学校で練習方法等が違うため自分はうまくできないんじゃないかと思う生徒、移動手段に不安を抱えている生徒もいる。それに対するサポートや指導者について考えていく必要がある。

・他の先生や地域指導者の指導に対して、7 割以上の生徒が好意的に捉えている。主な理由は、異なる指導者から専門家の指導を受けることは、自分の成長や大きなメリットをもたらすということであった。不安と答えた生徒に対しては検討していかなければいけない。先生と地域の指導者の教え方に食い違いが出るという心配。地域の指導者に対して信頼できないかもしれないと不安を抱えている生徒もいた。顧問との関係、コミュニケーションの違い、信頼性の不確実性などが要素として挙げられており、それらを踏まえてこれらを解消するような研修体制を検討していく必要がある。

・バドミントンをやりたいという声が非常に多い。美術、弓道、ダンスを作ってほしいという意見もある。部活の多様性、選択肢の増加、部活と学業の両立支援、指導者のコミュニケーションの改善、練習時間の適正化、働き方改革の推進、これらの要望を、学校や地域、関係者と共有し改善案の提案を行うことで、部活の充実や制度を満足、向上させることができると考える。

・中体連から１月に出された通知について、どの子にも大会に出る機会を与えてほしいという声に対して、日本中体連、北信越、県中体連が、クラブチームの生徒が中体連に出られるよう参加条件を緩和した。 ただし、スポーツ庁からのガイドライン（週 11 時間、平日 4 日間の 2 時間、休日・土日のどちらか一方の 3 時間）を遵守し、該当するクラブからの申請があった場合に県中体

連が審査・許可をして大会参加ができるということになった。今回の夏季大会からそれぞれ行われ大きく変わった。
・次に、拠点校部活について。長野県では、昨年度までは単独ではチームが組めない学校が強化にならないという条件をつけて、足りない学校同士が合同でチームを組むという合同部活動をやっていたが、今年度から撤廃して、部活動の人数が充足していても組むことができるしくみが拠点校部活である。
・さらに、部活動がないA中学校は、部活動のあるB中学校に部活の指導を委任することができる。それも含めて、3校、4校でチームを組んで出場できるチャンスが与えられるようになる。
・夏季大会は泰阜中が野球の拠点校となって、飯田市から2校、南部から2校、計5校で大会に出場した。ソフトテニスでは泰阜と阿南で生徒が大会に参加できるようになった。

○学校部活動、全市型競技別スポーツスクールの状況（事務局より報告）【資料№.４　ｐ１～４】
（要旨）
・令和４年度の部活動アンケートの結果より抜粋した学校部活動運動部の加入率は、695 名で約52.5%。運動部に所属して、地域での社会体育やクラブに参加している生徒が299人、運動部員の約43%の生徒が地域でも活動している。
・部活動未加入者は210人と全体の約15%で、そのうち地域のクラブに参加している生徒が97人、約5割の生徒が地域で活動をしている。部活動でしか運動をしていない生徒、部活動未加入で地域でも、部活、運動をしていない生徒に対してスポーツの環境を作っていくことが課題である。
・ｐ３　飯田市全市型競技別スポーツスクールについては認知度が約2割、まだまだ生徒に知られていないという課題がある。
・全市型競技別スポーツスクールに参加しない生徒の理由として1番多かったのは、やりたい種目がない、次に地域クラブにすでに参加しているから。塾や地域クラブ等で忙しい、塾とかの時間に時間が重なってしまうということが理由である。
・ｐ４　全市型競技別スポーツスクールの今年度と令和4年度の活動実績。まだ実施できていない競技もありますが、現在の参加生徒は、令和4年度の実績と比較して増加傾向にあるが、参加者をさらに増やしていくために、学校等への呼びかけをもっと積極的に行っていきたい。

○各中学校への聴き取り状況報告（事務局より報告）【資料№.４　ｐ５～６】
（要旨）
・現在の外部指導者数の現状把握と部活動指導員配置の希望について聞いた。
・外部指導者とは、現在部活動に入って、謝金や責任等は発生しない形で校長が認めた方に指導をお願いしている方である。謝金はほとんど無く、保護者会から出されている場合もあるが、善意で行っていただいている。部活動指導員とは、国と県、市町村が3分の1ずつ謝金を負担して指導いただく方であり、研修の義務や指導の責任を持っていただき、学校職員と同等となる。現在、飯田市は、この部活動指導員制度は入れていないが、今後の部活動の地域移行を進めていく上では、部活動指導員の配置を希望する中学校が多い。現時点で校長が考えている数でありご本人に聞いたものではない。
・合同部活動、拠点行部活動について模索している学校もある。
・今後課題となる教員の兼職兼業については、職員に対しての説明を行い理解を深めていく必要がある。
・保護者の意識としては、現在はまだ関心がそう高くはない。地道に説明は行っていく必要がある。

②めざす姿と段階的な進め方について（事務局より説明）　　【資料№.４　ｐ７～10】
・取組の目的は、「中学生がウェルビーンを感じながら 地域の中で主体的に様々な文化芸術、スポ

ーツ活動に取り組むことを通じて、心身の健やかな成長と豊かな社会性を育む」であり、常にここに立ち返り、協議をし、地域クラブ活動への移行をやっていくもの。

・飯田市として、これまでの取組を土台として、部活動の意義は大切にしながら、過去の良さだけにとらわれず、現在の子供たちが成長するためには何が必要かということを常にアップデートさせて進めていく必要がある。

・中学生の志向に合わせて中学校区や全市、飯田下伊那全域というエリアを活動の場として環境を整えていく必要ある。

・部活動の地域への移行は目標であり手段である。目的を達成するための一つのハードルである。あくまでも取り組みの目的を大切にし、子供たちが、いかに豊かな環境でスポーツや文化芸術活動に取り組めるかってことを常に考えていきたい。

・飯田市としての現時点での段階的な移行のイメージは、学校の部活動が令和８年度までに徐々に小さくなり、地域クラブの活動が徐々に大きくなっていく。できれば令和７年度末までに休日の活動は移行できると良い。できるところから進めて、令和８年度末には兼職兼業をかけた職員や地域の指導者が指導を担うようにしたいと考えている。

・拠点校部活から拠点クラブへ移行し、指導者を確保する。指導者の研修システムやプログラムの作成、移行についての説明は地道にやっていく必要がある。また、持続可能のための財源の確保、民間企業等との連携も図っていく必要がある。現時点でのイメージであり、今後具体化していきたい。

・移行のモデルとして、3 つの形を示した。最終的には、全てクラブ化していく。

・中学校区単位では難しい地域や種目は、合同部活動から拠点校部活、いずれは、拠点クラブというような形になっていくと考えている。

・現在行っている全市型競技別スポーツスクールが受け皿となって飯田地域クラブという大枠を考える。

・民間のクラブや社会教育関係団体は別に存在し連携していくことを想定している。

・指導者や運営主体、会費、保険、運営資金、送迎の課題があるが、これを乗り越えていくためのアイデアを出していただきたい。

（部会長）

・ご質問やご意見、それから、感想も含めてお時間いただきたい。アンケート結果についてご意見、ご感想も含めてございますか。

（委員）

・飯田市の子供たちが、スポーツクラブや部活動に入っていないということは、マイナスのことなのかプラスのことと考えていいのか。例えば、ラグビースクールだとかスイミングクラブだとか、外部での活動ができる場が整っていてそちらで活動をしている子が多い。見方によっては、決してマイナスではないと思うがどうか。

（事務局）

・昨年の部活アンケートによると、部活動の未加入者 15.9%、地域クラブに参加している生徒は 84 人。分析すると硬式野球や新体操等に生徒は行っている。生徒は、自分の学校生活や自分の私生活を含めて部活動との両立ができないので、うまくなりたいというような生徒は、地域クラブに行っているっていうのが、84 人、40%。傾向とすると、ある意味、場所があるし、生徒も自ら自分で考えて、選択をして行く場所があるのではないかと思う。

（部会長）
・大変子供たちが前向きに受け止めてくれていることがとても嬉しい感じである。そういったパーセンテージが全体的に高い。
・一方で、やはり子供たちの中には、他校と一緒、あるいは指導者の方がどういった指導をしてくれるかっていうことへの不安はやはり強く結果にも出ている。この辺を私たちがクリアさせてやる必要がある。またその点についても今後の取り組みで必要なことや考えていくべきことについてご意見をいただければありがたい。
・膨大なものをこのような形で具体的に整理していただき非常にわかりやすい。子供たちの声が聞けたっていうのはありがたい。子供を中心に私たちも取り組みたいという思いでいるので、そんな点でもありがたい。

（委員）
・生徒は、運動部と比べて文化部の方が良いのか、その辺りの理由はどう捉えているのか。

（委員）
・推測すると、南部の方だと文化部と運動部が一択しかないという状況が１つの理由ではないか。大きな学校でも地域のクラブに参加しているので、他の運動ができないからパソコンのような部に入るということもある。元々運動部よりは美術部やパソコン部が多い。

（部会長）
・それでは、アンケート結果以外の資料、特に段階的な進め方、スケジュール、を提示していただきましたが、その辺の流れやスケジュールについてよろしいか。
・令和８年を目標に、休日について地域に移行していくという、この辺の流れについてはよろしいか。また後ほどグループ討議のところでまたご意見があればお願いをしたい。
・結局、地域移行を進める上で、地域で担っていただける指導者の確保というのが最低条件必要になってくるが、人数を示していただいたが補足をお願いしたい。
（事務局）
・外部指導者と部活動指導員というお話をしたが、指導者として、指導者の心得６カ条を守っていただけそうな指導者や時間的に余裕があるかどうかということも考えている。これから指導者を確保していく上では、きちんと見極めていきたいと思う。実際これまでと同様やりすぎだとか体罰だとか暴言にも繋がりかねないので、その辺りも慎重に考えながら指導者の確保を考えていく必要ある。研修も重要なキーワードになってくる。

（２）グループ協議（25’）
①めざす姿と段階的な進め方について
②学校、保護者、地域指導者等への理解促進について
③指導者の確保や指導者の資質として必要な視点について
～グループワーク～

（３）まとめ・共有（10’）
・各グループで協議されたことの共有
○１グループ
【課題１】　めざす姿と段階的な進め方について
・段階的に移行していく方向はよいが、指導者の確保が最大の課題である。
・様々なことをやりたい子どもが、自由にクラブを移動できるようにしていく。例えば、バレーも美術

もやりたい子どもが両方できるように指導者の意識を変えていくことが大事である。
・しばらくは、教職員の兼職兼業に頼らざるを得ないのではないか。もちろん競技によって違うのでそれぞれにあったやり方で進めていくのがよい。
【課題２】　学校、保護者、地域指導者等への理解促進について
・クラブの理念を明確に伝えていく。自分たちのクラブは、競技力向上に重点を置いていくのか、楽しさを求めて緩やかにやっていくのかを生徒、保護者に伝えて選択するときの参考にしていく。
【課題３】　指導者の確保や指導者の資質として必要な視点について
・ボランティアだけではやっていけない。きちんとした報酬を支払う仕組みを作っていく必要がある。
・南信州クラブでは、指導者には誓約書のようなものを書いてもらい、しっかり契約を結んで単年度契約にしている。１年毎に契約を結んでいくようにしていく。
・平日の部活動は、学校教育の時間内に収まるようにして部活動の時間には、先生方の中で希望する先生方に兼職兼業で見てもらうことも考えられる。
・指導者の指導観をそろえていく必要がある。クラブの無法地帯にならないように、指導者の管理をする仕組みをつくっていく。
・教職員の兼職兼業をする地域をはっきりとさせていく。

○２グループ
【課題１】　めざす姿と段階的な進め方について
・拠点校型を目指して進めていくのがいいのではないか。
【課題２】　学校、保護者、地域指導者等への理解促進について
・現在中学生の子供を持つ保護者の中には、地域移行を自分事として捉えていない方も多い。「自分の子供は卒業するから関係ない」という雰囲気を感じる。
・実際に指導を行っている自分たちでも理解が難しいのに、保護者や地域の方に地域移行の全体像を理解してもらうには時間がかかるのではないか。ただし、保護者や地域の方に理解いただかなければ話が進んでいかないので、根気よく説明をしていかなければならない。
・中学生の保護者だけではなく、実際に地域移行に直面する小学生の子供を持つ親にも説明する機会があるとよい。
・スポーツ協会の加盟団体の指導者を一斉に集めて説明会をすれば、理解の共有を図れるのではないか。
【課題３】　指導者の確保や指導者の資質として必要な視点について
・教員(小・中・高校)の指導者として確保（兼職兼業）
・企業に指導者を求める。
・企業からの資金援助してもらい、指導者の謝金を確保する。
・指導者の質を確保するために研修会を実施する。ただし、ハードルを高くすると指導者を確保できなくなるので飯田市で独自の認定制度を作り研修会を実施してはどうか。
・各競技団体が指導者としていい人材を探す。

○３グループ
【課題１】　めざす姿と段階的な進め方について
・拠点校部活から拠点校(エリア)クラブへ段階的に移行していくことが良い。
・移行の初期は、慎重な対応が必要である。新入生は受け入れやすいけれど、在校生には抵抗があるのではないか。
・スイミングなどの個人種目は比較的移行しやすいのではないか。競技によって違う。
【課題２】　学校、保護者、地域指導者等への理解促進について
・学校内での職員研修
・PTA の役員会

・小学校の校長会や教頭会
【課題３】　指導者の確保や指導者の資質として必要な視点について
・教員(小・中・高校)の指導者として確保（兼職兼業）
・公官庁や企業に指導者を求める。
・企業からの資金援助
・指導者の質を確保するためには財源が必要（謝金　1,600 円/１ｈ）
・補助金に頼らず、自走できる仕組みが必要である。
・必要な要素にとらわれすぎると確保は難しい。育成していくことが大切である。

５　アドバイザーからのお話（10’）

県の動向については、7 月に、県が保護者、生徒、教員対象のアンケートを実施したところである。スポーツ担当者会で話題になったのが、専門的な知識、技能を教わりたいという回答について、専門性とは何を指すのかが話題になった。一般的に専門的といえば、競技力が高い方で、専門的な戦術とか技能を教えられるっていうことを指すのではないかという話題にはなったが、実際、部活動とかスポーツ少年団のようなスポーツ活動を進めていく上では、組織運営、組織作りができるコーチだとか、人間関係の形成への配慮ができることも専門性であるという話をした。専門性とは何かということを関わる大人は、子供が何を望んでいるのかを気にすることもいいかなと思った。

アンケートの回答で出てきた、子供たちがいろんなコーチから教わることで、それぞれの指示や指導に振り回されて困るという意見がありましたが、そういったことに対して、まずは指導者が、指導力を高めていくこともあるが、逆に言えば、子供自身が、「コーチと先生で言うことが違うんですけど」って言える環境をどう整えていくかってことも重要じゃないかなと思う。

先ほど、グループ 1 から出てきた、休日の地域移行でバレエをしたい、技術がしたい、クラブ間の行き来ができるよう、関わる大人、コーチ、 先生、保護者が、どれだけその活動いいよねって認められるかどうかということを、意識の醸成も含め、また子供にも意見を言って良いと伝えていく必要もあると感じながら伺っていた。

拠点校クラブという方向性がすごく素敵だなと思って。特に今年の夏で言えば、中学校を拠点とした活動で、1 人や 2 人しかいない学校の生徒がやりたい部に所属できたということに喜びを感じているコメントが新聞にもあったが、そういった形の拠点クラブはありだと思う。

息子は中学でバスケ部がなかったので入れず高校にいってやってはいるが、中学の時に、例えば別の中学校に入らせてもらえたら、とても嬉しかっただろうと思う。

ただ、毎日練習している〇〇中の生徒の中に、週に 2 回出る息子が参加した時に、どれだけ指導者の方が、時々来る選手に配慮できるかと考えると、拠点校方式は私の想像ではコーチの手腕が問われると思う。練習に毎日出てない子が試合に出場できる機会をどう作るのか。「お前はなかなか練習に来てない。送迎をしてもらえず来られないから、あなたは出られなくてしょうないよね。」とならないよう、拠点校の良さは子供にとっての環境づくりにもなるけれど、大人たちの意識をきちっと育んでいかないと子供が悲しむことになってしまう可能性がある。指導者育成のための指導者研修は大事だと思って伺った。

６　その他、連絡（2’）

・次回の部会について
　期日　９月２０日（水）１９：００～２０：４５　　に決定

７　閉　会